事例3 長崎県立諫早高校

対話を通した多様性との出会いの中で「キャリアエリート」を育てる

長崎県内屈指の進学校として着実に実績を積み重ねている諫早高校。だが、その指導のあり方は、近年、「教師が答えや指示を与える指導」から「生徒に時間や機会を預ける指導」へと大きく変化している。学校活動の様々な局面で「対話を通した多様性との出会い」を重視しながら高い主体性を持った「キャリアエリート」を育てる同校の教育活動を紹介する。

教師からの自立を促すため社会の多様性に気づかせる

国公立大学を志望する生徒が多い長崎県立諫早高校は、例年、全国屈指の国公立大学合格率を上げている。生徒、そして保護者は学校に全幅の信頼を寄せるが、それが高じ、「生徒が教師の与える答えや指示を待っていると感じることがある」と進路指導主事の後田康蔵先生は近年の生徒の気質における課題を説明する。

「変化の激しいこれからの社会は、私たち教師にも予測が不可能です。進路選択においても、教師の持っている知識の箱の中だけで、生徒に自分のあり方、生き方を考えさせるのは難しくなっています。生徒には高校3年間を通して、よい意味で教師を疑いながら自分で考え、選択する力を身につけてほしいと思っています」（後田先生）

生徒が教師である自分を信じてくれることに満足せず、よい意味で生徒に教師を疑う力を身につけさせたい。そこで、同校が取り組んでいるのが、社会の多様性に気づかせる仕かけづくりだ。教師の考えはいつも正解とは限らず1つの意見に過ぎないことを理解し、何が最適解なのかが分からないからこそ、様々な人たちと対話し、いろいろな考えに耳を傾ける……そんな生徒を育てるため、仲間のユニークな意見や経験を共有できる対話の場づくりを行っている。

長崎県立諫早高校
後田康蔵 うしろだ・こうぞう
教職歴22年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。

長崎県立諫早高校
藤村 誠 ふじむら・まこと
教職歴30年。同校に赴任して4年目。1学年主任。

長崎県立諫早高校
高比良周一 たかひら・しゅういち
教職歴20年。同校に赴任して10年目。2学年主任。CDA（＊1）委員長。

長崎県立諫早高校
砂川一真 すながわ・かずま
教職歴16年。同校に赴任して7年目。3学年主任。

同校における対話の場づくりの軸となっているのが、2015年度より年2、3回の頻度で開催されている進路講演会「グローバル講演会」

長崎県立諫早高校

◎校訓「自立創造」の理念のもとに、人間性を豊かにして徳、知、体の調和のとれた社会に有為な逞しい人間の育成を目指す。併設型中高一貫校であり、中学校3クラス、高校7クラスを擁す。陸上部をはじめ、全国大会に出場する部活動も多い。
◎**設立** 1911（明治44）年
◎**形態** 全日制・定時制／普通科／共学
◎**生徒数** 1学年約280人
◎**2018年度入試合格実績（現役のみ）** 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、広島大、九州大、長崎大、熊本大などに213人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ140人が合格。
◎**URL** http://www.news.ed.jp/isahaya-h/

＊1 Comprehension（理解）、Discovery（発見）、Ambition（大志）の頭文字をとった、同校独自の進路観醸成プログラム。

だ。グローバル講演会では、グローバルに活躍するＮＰＯの代表や研究者、実業家等をゲストに迎えるが、その人選や登壇交渉、全校生徒に提供する事前学習資料の製作、そして講演会やゲストとの対話の場のプログラムづくりなど、メンバーが入れ替わりながら各回十数人の有志の生徒が数か月をかけて主体的に進めている（本誌２０１６年６月号P.58参照）。

「グローバル講演会では、様々な社会問題の解決に取り組む方をゲストに迎えますが、実際にどんなことを話してもらいたいかは生徒が話し合い、ゲストに伝えます。生徒たちが関心を持っているのは、ゲストが自分の人生の価値をどのように考え、社会への働きかけを決意していったかです。多様な価値観を持った校外の人の話を聞きながら、これからの社会を生きるために必要な力は何かを考えています」（後田先生）

学部・学科や学問、職業などを切り口に、自分が関心を持つ人、自分と志向が近い人の話を聞こうとするのが以前の進路講演会だとしたら、それほど関心を持っていなかった分野で活躍する人の話を聞き、その生き方から共感や違和感を自分なりに整理し、新たな視点を学ぶのが今の進路講演会だと後田先生は話す。

学校という社会の変革に動き始めた生徒たち

グローバル講演会を主体的に企画・運営する有志の生徒の姿は、全校の生徒、教師に「高校生でもここまでできる」という驚きを与え、学校の様々な活動が生徒の対話を土台にした主体的なものに生まれ変わっているという。特に、以前から存在した既存の取り組みが、生徒に任され、大きく価値を高めていると２学年主任の高比良（たかひら）周一先生は話す。

「例えば、中学生に向けた学校説明会においては、生徒会の生徒が『自分たちの学校の魅力は何だろう』『どのように中学生に伝えればよいだろう』と話し合い、それを踏まえて、校長に対して『こんな内容で話をしていただきたい』と企画書にまとめています。また、文化祭は今年度から２日間になりましたが、それも生徒会の生徒たちが企画を立て、私たち教師に提案した結果です。文化祭を２日間にしようとした一番の理由は、『グローバル講演会や課題研究などに取り組む同級生のユニークな活動経験や、そこでの学びを、ほかの生徒に共有する場をつくりたい』と考えたからです。学校には様々な個が存在することに気づき、そんな学校に対して誇りを持っているのだなと思いました」（高比良先生）

今、同校では、「ランチミーティング（**写真１**）」が毎日のように開かれている。部活動で忙しい生徒たちが、学年やクラスを超えて自由に集まれる昼休みに行うミーティングのことで、グローバル講演会を運営する有志生徒が始めたものだが、今では校内の様々な生徒主体のプロジェクトに波及して、学校行事のあり方などが話し合われているという。

「最近では、部活動の部長が悩みや疑問を共有するランチミーティングが企画されました。また、生徒会役員に『委員会活動の取り組みを評価する指標があると、活動が改善されながら積み上がっていくよね』とアドバイスしたところ、生徒は委員会活動を評価するためのルーブリックの作成を思い立ちました。近々、そのランチミーティングも行われると聞いています」（高比良先生）

生徒同士の対話を大切にしながら主体的に活動する生徒を、後田先生は「キャリアエリート」と表現する。

「これまでは、勉強と部活動が生徒にとっての活躍の場でした。しかし今、本校にはそうした枠にとどまらず学校行事や課外活動などで活躍する、いわばキャリアエリートが出現しています。そして、勉強エリートや部活動エリートがキャリアエリートに憧れと尊敬の念を持って接し、『勉強や部活動だけで満足していては駄目だ』と活動を広げようと

写真１　グローバル講演会を始め生徒の主体的な活動でよく見られる「ランチミーティング」。学校や社会をよりよくするための方策を話し合う、勉強でも部活動でもない第三の活動が増えてきた。

していています。また、そうした生徒の出現によって、私たち教師が『これも任せてみよう』と生徒に背中を押される、よい循環が生まれているように思います」（後田先生）

特別な生徒でなくても任せれば、できる

対話を通した多様な価値観との出会いを全生徒に保証する取り組みも始まっている。3学年主任の砂川一真先生が例に挙げるのは、3年生が高校に入学した直後の取り組みだ。

『『先生だからすべて正しいということはない』『高校生活で疑問や悩みが生まれた時は、大人に頼りきるのではなく、クラスの仲間との対話を通してよりよい答えを探してほしい』と話をし、その後、学年全員が体育館で『なぜ、学ぶのか』をテーマにグループで話し合いました。お互いをまだよく知らない者同士が協力して模造紙に考えをまとめる中で、この学校は多様な価値観を大切にしながら、正解が誰にも分からない問いを仲間と話し合って考える学校なのだと、生徒は感じ取ったのではないでしょうか。身近なテーマでも仲間との対話で深掘りでき、そこに多様な価値観を見いだせるのだと実感することで、対話が日常化していきます」（砂川先生）

学年全員が参加する進路説明会も、生徒主体の企画になっている。

「外部講師をゲストに進学環境について講演をしていただいた時も、各クラス委員が何について知りたいかをアンケート調査し、そこから話をしてもらいたいことを考え、講師に伝えました。正直、生徒がここまで主体的に動けるとは思っていませんでした。ただそれは、単に私たちが任せてこなかっただけだからかもしれません」（砂川先生）

図1　18年度入学生に提示したルーブリック「本校の目指す生徒像」

観点	S	A	B	自己評価	評価理由・具体的な取り組み
授業	各教科の授業内容を十分に理解し、授業の中では、より高次の学習である「質問する。」「話し合う。」「実習する。」「人に教える。」活動を積極的に行うことで、しっかりと習得できた。 結果として、自己目標を超える成果を残すことができた。	各教科の授業内容をほぼ理解し、授業の中では、先生の話を良く聞き、わからないことは、先生や友人に質問するなどして、難しい問題や課題にもチャレンジした。 結果として、自分の目標と同程度の成績を残すことができた。	各教科の授業内容で理解できないこともあったが、自分でふり返ったり、質問することでとかついていくことができた。授業の内容はおむね理解できた。 自分が目標とする成績には、わずかに及かった。		
家庭学習	長期的、短期的学習計画を主体的に立て、毎日欠かさず、予習、復習、課題に加え、自分の苦手な教科へのテーマ学習も積極的に行った。	指示された課題などの意義を理解し、毎日、自分の成長のために積極的に取り組んだ。課題が少ない日であっても、3時間の学習を継続して行った。	指示された課題などは、おおむねやり遂ことができた。 学習時間は、課題などの量により変動がた。		
総合的な学習の時間	活動の意義や目的を理解し、積極的に活動した。活動では、興味、関心があることだけではなく、知らなかった、体験したことがなかった分野についても積極的に学び、対話により自己の可能性や選択肢を広げることができた。ポートフォリオにより、自己を振り返ることで成長につなげた。	毎回、指示された活動に真剣に取り組んだ。周囲との対話が、自己の可能性を広げたり、見識を広げることを実感した。活動をポートフォリオにより欠かさず残すことができた。	毎回、指示された活動については、真面目活動し、活動履歴も欠かさず残した。		
学校生活	時間や規律を守ったり、自分に与えられた役割を果たすだけでなく、学校や学級をよくするために、新たな企画や活動に主体的に参加した。	時間や規律を常に守ることができた。また、自分に与えられた役割は十分に果たすことが出来た。また、集団の一員として協調性を持って活動することもできた。	時間や規律は、おおむね守ることができ周囲に左右されず、自分の良識に従い行動た。		
部活動・課外活動	自己を成長させるために、テーマや目標を設定し、毎日、積極的に活動した。また、周囲との対話により、リーダーやフォロワーとして、部や団体を引っぱることができた。	課外活動が行われる日には毎日参加し、自己の成長のために努力した。また、集団のために、与えられた役割を果たした。	課外活動には、可能な限り参加し、自己の力や技術が向上しつつある。		
主体性	志手帳を毎日、有効に活用するだけでなく、活用方法を自分なりに工夫し、自己管理に努めた。また、常に問題意識を持ち、自分の意志で、何事にも挑戦した。	志手帳を継続して活用しながら、自己管理能力を高めることができた。自分の意志で取り組んだことが、1度以上はあった。	志手帳は、指示された時には着実に活用自己を振り返った。そのことで、自己管理きるようになったと感じている。		
コラボレーション	異年齢や異性、校外など、活動の範囲を積極的に広げ、対話を通じて、一人では、果たすことができない成果を残すことが出来た。	気心の知れた仲間やチームメイトとも、問題意識を持ち、新たな課題解決に取り組んだ。その結果、少しずつ集団が成長していると感じている。	集団で行動することを求められた状況では周囲と協調して活動することが出来た。		
チャレンジ	自分の苦手なこと、未体験のことに、校内外を問わず積極的にチャレンジした。その結果、自分の成長を実感するとともに、新たな課題を見つけ継続的に活動した。	周囲にすすめられ、自分の苦手なこと、初めての事に1度はチャレンジしてみた。継続は出来ていないが、またチャレンジしようという思いがある。	今まで行ったことのないようなことにチャレする機会はなかったが、今後、チャレンジいと考えているものがある。		

＊学校資料をそのまま掲載。

多様な視点から生徒を評価する進路指導

対話を重視し、生徒の主体性を尊重する指導を学校の文化として定着させるためには、教師、生徒による目指すべき生徒像の共有が必要だ。同校では、18年度の1学年より「本校の目指す生徒像」を定め、ルーブリックによる評価ができるようにしている（**図1**）。授業、家庭学習、学校生活、部活動・課外活動などの5つの場面と、主体性、コラボレーション、チャレンジの3つの観点で高校生活について4段階で状態を記述したもので、生徒、保護者、そして学年団の指針として共有されている。仲間と対話し、主体的に動く力を生徒に望む教師が、場面に応じた具体的な行動指標を生徒に示したわけだ。

そのルーブリックを用いて、学期末、生徒は振り返りを行うが、そこ

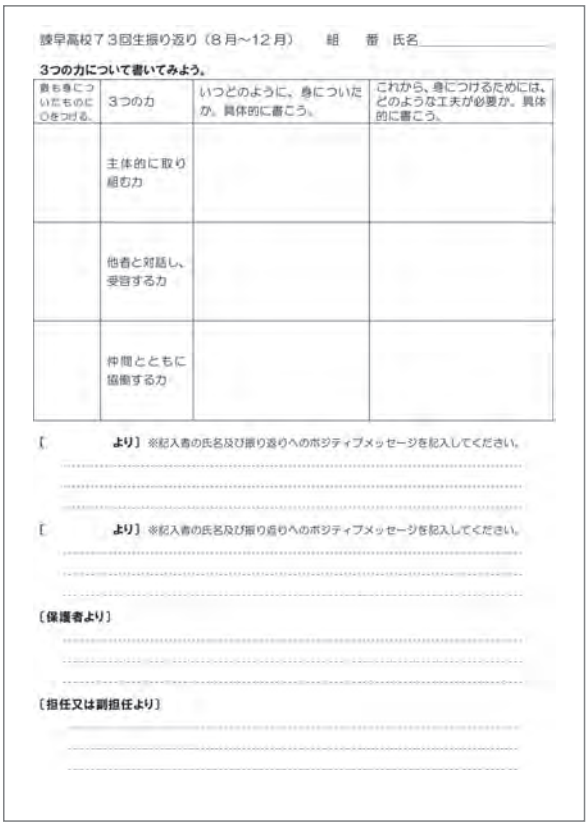
では自己評価に加えて、保護者、さらにクラスの仲間のコメントが書き加えられる（**図2**）。自己評価と他者評価は、担任との面談で生徒の内省を深めるヒントになると1学年主任の藤村誠先生は話す。

「生徒を評価する視点が増えることで、それぞれの生徒のよいところ、頑張っている部分を見逃してしまうことが少なくなります。もちろん、保護者や同級生が厳しめの評価をしてしまうこともありますから、そんな時は担任が『あなたはこんなところでも努力していたよね』と生徒を励ませばよいのです」（藤村先生）

今年度の3学期には、1学年団で資質・能力ベースの進路検討会を予定している。生徒の活動実績とルーブリックによる自己評価、他者評価、さらに1学期に受検したベネッセの「GPS－Academic（＊2）」の結果を客観評価として材料にした検討会で、同校でも初めての試みだ。

「キャリアエリートが増える中、生徒が社会に対してどのような課題意識を持ち、校内外でどのような活動をしているのかを丁寧に共有することで、2年生になった生徒に『こんな活動をしてみては？』と働きかけることができます」（藤村先生）

図2　他者視点を交えた1年生2学期の振り返りシート



諫早高校7 3回生振り返り（8月～12月）　組　番　氏名＿＿＿＿＿＿

3つの力について書いてみよう。

良も身についたものに○をつける。	3つの力	いつどのように、身についたか。具体的に書こう。	これから、身につけるためには、どのような工夫が必要か。具体的に書こう。
	主体的に取り組む力		
	他者と対話し、受容する力		
	仲間とともに協働する力		

〔　　より〕※記入者の氏名及び振り返りへのポジティブメッセージを記入してください。

〔　　より〕※記入者の氏名及び振り返りへのポジティブメッセージを記入してください。

〔保護者より〕

〔担任又は副担任より〕

＊学校資料をそのまま掲載。

社会貢献する達成感を高校時代に味わわせる

生徒が主体的に様々な活動に取り組む学校の様子は、近隣の中学生に知られるようになった。

「学校説明会でも、勉強だけをやりたいと入学を希望する生徒が減っています。既に『グローバル講演会の企画に携わりたい』と入学してきた生徒もいます」（後田先生）

対話を通して多様な価値観に出会い、自分や社会に対する問題意識を深めることを重視する諫早高校。今後は、自分の中に生まれた問題意識を、実際に解決するための手段まで考え、挑戦できるようにサポートしたいと教師たちは考えている。

「『総合的な学習の時間』で取り組む課題研究も、単に興味のあることを調べるだけでなく、それは社会のどんな問題を解決するのか、社会にどんな価値をもたらすのか、考えながら取り組ませています。実際に解決に至るのは困難でも、高校卒業後も考え続けたい大切なテーマを見つけた上で、大学に進学してもらいたいと思っています」（後田先生）

「理科離れの原因を分析し、科学が好きになる授業を考えた。附属中学校で授業させてほしい」「ヒット曲のメロディーと歌詞を分析して同級生を応援する歌を作った。昼休みに中庭で演奏したい」など、高校生らしいユニークな視点で自分ができる社会貢献を考え、実行する生徒も出てきている（**写真2**）。

「諫早高校はこの数年で本当に変わりました。しかしそれは、私たち教師が変わったからではありません。変化したのは生徒であり、私たちはそれに引っ張られ、変わっているのです。そして、この変化はまだ成果ではありません。本当の成果は、生徒が卒業した後、もっと大きな形で表れてくるはずです」（後田先生）

写真2　課題研究を通して、応援歌づくりや中学生向け授業など、学校という社会に貢献しようとする生徒も現れている。

＊2　ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。